

氏名（本籍）	北野裕子（大阪府）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博課第400号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	近代繊維産業史論 ーモノづくりからみた丹後縮緬業ー
論文審査委員	（委員長）教授 小路田 泰直 准教授 西谷地 晴美 教授 渡辺 和行 教授 岩崎 雅美

## 論文内容の要旨

近代日本経済史の研究において、確かに繊維産業史の研究はながく中心的地位を占めてきた。しかしその関心は、如何にして日本経済が、幕末強制的に世界市場に編入された状態から脱却し、対外的自立を勝ちとってきたか、その自立を勝ちとる過程で、資本力、技術力に劣る日本資本主義が、如何に過酷な労働条件を多くの労働者に強いてきたか、に集中し、内需向けの地場産業が、如何にして近代産業に成長し、国内市場を形成していくかといったことには、ほとんど関心が向けられてこなかった。

だから研究対象も、自ずから、当初最大の輸入品であり、その後最も機械化の進んだ（産業革命の牽引役となった）綿紡績業や、1930年の大恐慌勃発まで一貫して最大の外貨獲得産業としてこの国の政治、経済を支えた生糸紡績業にかたより、地場の織物業は、綿であれ、絹であれ、麻であれ、自然、盲点におかれてきた。

しかしその偏りは、結果相当にゆがんだ日本資本主義像を生み出し、研究成果からリアリティーを奪いさり、経済史研究——や、その一部としての労働問題史研究——そのものの衰頹を招いてしまった。例えばそれは、綿紡績業や生糸紡績業に働く人々は、女工が中心だが、とてつもない低賃金・長時間労働のもとにおかれ、奴隸的（非人間的）搾取を受けていたとするイメージである。戦前であれば細井和喜蔵の『女工哀史』（1925年）や、戦後であれば山本茂美の『あゝ、野麦峠』（1968年）がひろげたイメージである。

論文提出者は、まずそのイメージのゆがみに気づいた。本論文第5章「大正昭和期の機業場で働いた女たちー自由な女工像の創出ー」では、細井和喜蔵の出身地、京都府与謝郡加悦町（現与謝野町）

の地場産業、縮緬業で働く男女労働者の、大正期から昭和戦前期にかけての実体を分析し、実は縮緬業において、当該期、男女間に、ジェンダーを理由にした賃金上の格差などほとんどなかったことを明らかにした。『女工哀史』的女工イメージに違和を呈したのである。

そこで提出者は、そのゆがみのもとを正すべく、日本資本主義発達史像そのものの再構築にとりかかる。それが本論文である。

研究上の偏りが生み出すゆがみを補正するためには、その偏りが逆に生み出す研究上の空白を埋めていく努力が必要になる。そこで北野は、二つのことに目標を定め、日本資本主義発達史像の再構成に取り組んだ。一つは、内需向けの地場産業としては、きわめて有力な産業でありながら、先に述べたような理由により、従来あまり研究されてこなかった、丹後縮緬業をとりあげ、その近代化の中に、日本繊維産業全体の近代化の文脈を読み解くこと。今一つは、その場合、「モノ」としての縮緬のでき方に着目すること。縮緬をその交換価値のレベルでとらえるのではなく、まさに使用価値のレベルにおいて、「モノ」としての作られ方のレベルにおいてとらえることである。

章立ては以下の通りである。

## 序章 近代繊維産業と丹後縮緬

### 第1章 丹後縮緬業の概観―地域からの展望―

### 第2章 明治期における多様化―どのような縮緬が織られたのか―

### 第3章 明治期における粗製濫造問題の内実―技術力を考える―

### 第4章 ブランドの誕生―「信用」の形成と表象―

### 第5章 大正昭和の機業場で働いた女たち―自由な女工像の創出―

### 第6章 昭和戦前期の丹後縮緬業―近代繊維産業としての集大成―

## 終章 新たな近代繊維産業史像の創出

まず序章で、以上述べてきた丹後縮緬業史研究不在の研究史的必然を解いた上で、各章それぞれ次のようなことを明らかにした。

第1章では、縮緬業が享保期以降丹後地方にひろがっていくプロセスをまず概観した上で、「丹後縮緬については……現状を分析・紹介した論稿や歴史研究などがあるが、この地になぜ縮緬業が発展したのかを問うたものは意外と見当たらない」との、丹後縮緬業史をめぐる研究の現状を紹介し、「縮緬業を発達させた主体、すなわち丹後という地域内部にイノベーション（改革・革新）はなかったのだろうか」（p15）との、提出者自身の問いを定立している。

その上で、次の三つのことを発見している。

一つは、丹後地方には、近世以来藩（峰山藩）の積極的な保護政策のもと縮緬業を発展させてきた

峰山を中心とする地方（竹野郡・中郡）と、藩の縮緬業抑制政策（農本政策）にあらがって人々が縮緬業を発展させてきた加悦を中心とする地方（与謝郡）の二つの地方があり、その二つの地方における縮緬業の発展は、必ずしも同一步調をとっていないこと。

今一つは、その二つの地方の内、江戸時代から明治時代半ばにかけては、竹野郡・中郡地方が、縮緬の質（万博などでの評価）・生産量両面において優位にたっていたが、明治後半になると、それが逆転したこと。

そしてその逆転の原因が、ジャガード機の導入を機とする、与謝郡における多種・多様生産の開始にあったことの、三つである。

要は、普通いわれるような京都問屋への従属ではなく、積極的で、主体的な地域におけるイノベーションの蓄積こそが、丹後における縮緬業発展の原動力であったことを明らかにしたのである。

したがって、丹後縮緬同業組合（1921年結成）や、その土台となった各郡縮緬同業組合の力によって1915年（国練期成同盟会結成）以降促進され、1928年になって実現される、国練（最終「精練」工程の地元化）の動きなども、そのイノベーションの必然的帰結と、とらえている。

次に第2章では、ではそのイノベーションの内実とは何か、それを加悦町史編纂過程でみつかった明治末年の生地見本帳『橋立』などを用いながら、具体的に論じている。その結果、「昭和10年以前の縮緬は糸における工夫だけによるものにすぎない」（p34）とする、従来の服飾史の世界での「通説」がいかに間違っただけのものであるか、余すところなく暴露している。

明治20年代以降進んだジャガード機の導入が、いかに豊かな、先にも触れた多種多様生産を可能にしたか、それを見本帳を使い、可視的に明らかにしているところは、圧巻である。従来の歴史学になかった手法の導入に成功しているといえよう。

そして第3章では、その、一つ一つの段階のイノベーションが、実は繰り返し騒がれた「粗製濫造問題」をきっかけにおきていたことを明らかにした。

明治10年代・20年代の、『興業意見』などに書かれた「粗製濫造問題」は、実は、輸出生糸の増大に伴う原料生糸の入手難が原因でおきた粗製濫造問題であった。したがってそれは、一方で、生糸生産の過程で出る「くず糸」を原料にした「紡績絹糸」や、綿糸を特殊加工として絹糸のようにみせる「瓦斯綿糸」を原糸とした、新たな織物技術の発展の契機となった。ちなみにその点での技術革新の先導したのは、竹野郡・中郡の人々であった。

次いで、明治30年代以降の「粗製濫造問題」は、丹後縮緬を輸出産業として育成しようとするとき、それが輸入する側の外国人（主に西洋人）の嗜好に合わないことからくる粗製濫造問題であった。したがってそれは、多種多様な嗜好にあわせた織物を、少量づつでもつくる技術を、飛躍的に発展させるきっかけとなった。ちなみにその技術革新を先導したのは、今度は、明治20年代半ばにいち早くジャガード機の導入に踏み切った杉本治助率いる、与謝郡の人々であった。

しかもこの、明治30年代以降の、丹後縮緬における多品種少量生産技術の確立は、西陣織りの再生にも大きな力となったことを、北野は指摘している。1886年に——農商務大輔品川弥二郎らの勧めで——欧米視察に出かけて以来、「日本の織物業のレベルは欧米に遜色なし、日本の場合、紋様よりも色が模倣されていると初代特許庁長官になる高橋是清に進言し、自ら日本の織物技術の高さを立証するために、万国博覧会に最高級技術を駆使した美術織物を出品し続けた」(p68～69) 二代川島甚兵衛ひきいる川島織物は、美術織物に力を尽くす余り、明治30年代後半になると、倒産の危機に瀕していたが、輸出対応能力を身につけた丹後縮緬はその危機を救ったのである。丹後の縮緬業者たちが考案した技術が、川島の技術として今日に伝えられている所以である。

かくて、丹後縮緬業のイノベーションが、「粗製濫造問題」がいわれる度に、それを乗り越えるかたちでおきてきた歴史を見事に描き挙げたのが、この第3章であった。

そして、圧巻は第4章である。本章では、「丹後縮緬」というブランドが如何にして形成されたかが論じられ、日本資本主義論にこれまでなかったブランド論が展開されている。生産地である丹後地方が常に苦悩しなくてはならなかったのは、販路の確保であった。だから1928年に国練が実現するまで、最終工程である精錬は西陣に任せ、京都問屋の支配に甘んじなくてはならなかったのである。

ではどのようにして販路を拡大していったのか。江戸時代から豊岡県時代(1872～1876年)にかけては、藩及や県の力による品質保証を受けることによって拡大していった。だから積極的な縮緬業保護政策をとった峰山藩において、同業は質的にも、量的にも、最も発展したのである。これまで江戸時代多くの藩で行われた藩専売制は、財政補填のための民衆収奪政策のようにいわれてきたが、それは一面的な見方で、実はそれは、藩権力による特産物奨励のための品質保証政策でもあったのである。

しかし1876年、丹後が豊岡県から京都府に移管されると、その種の権力による品質保証政策は打ち切られた。ではどうなったのか。結局、長期にわたる悪戦苦闘を経て、生産者自身が組織する同業組合の力による品質保証制度の確立がはかられて。それが大正期になると、「丹後縮緬」ブランドの成立につながったのである。時あたかも、それは1921年に丹後縮緬同業組合が結成され、丹後一円の縮緬業者が国練りの実現に向けて団結したときのことであった。

では「丹後縮緬」ブランドを最終的に補償する権威の源泉は何か。歴史の中で鍛えられた「丹後という地域全体の結束」(p89)であったというのが北野の結論である。

そしてその地域の「結束」の中には、企業家と労働者の「結束」もあるという趣旨が込められて書かれたのが、第5章だ。第5章では、最初にジャガード機を導入し、西山機業場を経営した杉本治助の家の文書に残る「労働カード」などの詳細な分析をもとに、『女工哀史』的女工像が、いかに大正期から昭和戦前期にかけての丹後縮緬業に働く女工の実像と乖離したものであったかを明らかにした。「世界大戦の影響を受けて……(大正)6年以降女工が男工に追従若くは凌駕し……以後は、男女がなくなる。第一次世界大戦による好景気が縮緬の需要を高め、大正6年(1917)には、女工の賃金が

男工を上回っており、大正10年（1921）以降～昭和7年（1932）に至るまで、賃金による男女差はなく、技術や仕事別の賃金差のみになっていく。」（p105）これが女工の実態だったというのである。

そして最後に、第6章において、丹後縮緬業においておきた、経済史の常識に反する出来事に触れている。1929年10月のニューヨークのウォール街の株価大暴落に始まる世界恐慌は、丹後縮緬業に関してだけは、天佑神助として働いたというのである。それは空前の好景気到来のきっかけになった。それまで主にアメリカ向けの輸出品であった生糸の価格が、輸出の停止により大暴落した結果、逆に明治以来の原糸不足が解消し、縮緬業に低廉で良質な生糸が十分に行き渡るようになった。確かに縮緬の価格も下がった。しかしそれ以上に原材料である生糸の価格が下がったからであった。さらには製品の価格低下が、それまで縮緬など買えなかった層にまで、縮緬購買層を拡大したからであった。

しかも、その逆説的な好景気は、糸価下落だけが原因ではなかったことが重要であった。それこそ明治以来長年にわたる、「粗製濫造問題」に苦しみながらの技術革新の積み重ねの結果でもあったのである。つくりあげられてきた多品種少量生産技術が、ようやく日本の購買層の心をとらえたのである。それが、もう一つの重要な原因であった。

そしてその事実を踏まえて、北野は最後に次のような問いを発っているのである。「昭和戦前期という時代を恐慌からファシズムへという見方が正しいのか、改めて、この時期の経済実態を地域ごとに、産業ごとに1つ1つ積み上げ、日本資本主義が本当に脆弱であったのかを考えてゆく必要がある。」（p114）との。縮緬業の分析で得た知見の、普遍化への意欲をみせているのである。

近代日本資本主義の発展を先導した、繊維産業の発展を、丹後縮緬業に注目することによって、経済的外圧に対する官主導の（殖産興業政策中心の）抵抗の歴史として描くのではなく、日本社会を構成する一つ一つの地域社会の主体的イノベーションの積み重ねの結果として描くことに成功した論文、それが本論文である。

## 論文審査の結果の要旨

日本資本主義の発達が何によってもたらされたかということをめぐることは、伝統的に二つの考え方がある。一つは、江戸時代以来の日本経済の内的近代化がそれをもたらしたとする考え方、もう一つは、むしろ日本社会の後進性が、それをもたらしたとする考え方である。戦前期の「労農派」や、戦後の「近代化論」者の考え方が前者であり、戦前期以来の「講座派」の考え方が後者である。

後者については少し説明を要するが、例えば「講座派」の場合は、「半封建的地主制」の存在が、小作人の劣悪な労働条件との連動で、極端な低賃金・長時間労働を生み、それが日本資本主義のテイクオフを支えたとする考え方である。

ではどちらが優勢だったのか。少なくとも日本史学の世界では、ながく後者が優勢だったのである。今日戦後歴史学と形容される歴史学は、その大方が、後者の流れを汲む歴史学といってよい。

だから日本史学は、労働者や民衆の生活を、できるだけ劣悪なものと描きたがるのである。かつて山田盛太郎が、日本の労働者の低賃金をさして「インド以下の低賃金」（『日本資本主義分析』）と、差別的に表現したことなどは、その典型であった。『女工哀史』や『あゝ、野麦峠』がつくり出す悲惨な女工イメージが一人歩きする背景がそこにあった。さらには、内需経済を等閑に付するのである。労働者の低賃金・長時間労働を武器に、国際競争力を高めていくことが、日本資本主義発展の唯一の方向性だと思い、労働条件の劣悪さをいうためには、国内市場の狭隘さをいわなくてはならなかったからである。

そうした日本史学の大きな研究史の流れの中であって、論文提出者は、前者の考え方に改めて光をあてるべく、本研究をおこなっている。その場合後者の考え方はリアリティーを失い、空疎化しているが、なお未だ影響力をもち続けていることを前提としている。したがってその視線は、内需志向型産業の典型である丹後縮緬業に向けられ、さらには『女工哀史』的女工イメージの修正に向けられているのである。

ではその意図のもと書かれた本論文の成果は何だろうか。

一つは、意図的に「講座派」的視点を脱却することによって、これまであまり認識されてこなかったいくつかの事実を、新たに明らかにしたことである。列挙しておく、以下のとおりである。

① これまで、財政難に苦しむ諸藩の、むりやりの商工業抑圧政策のように思われてきた藩専売制が、実は藩権力による藩内物産の品質保証政策であり、販路拡大政策であったことを明らかにした。峰山藩と宮津藩という小藩の分析から得られた結論なので、どれだけその結論を敷衍できるかは、今後の

検討をまたなくてはならないが、近世大名権力の本質をどうみるかということについての、優れた問題提起になっていると思う。そして論文提出者のように藩専売制が、財政再建のための収奪政策ではなく、むしろ殖産興業のための品質保証政策であったとすれば、江戸時代日本社会の近代性が、より鮮明になり、論文提出者の意図にかなうと思う。

② 明治初年の日本経済を襲った「粗製濫造問題」が、単に「営業の自由」の原則が後発的資本主義をとらえたときにおきる、粗悪品の乱売問題ではなく——確かにそのような問題としての「粗製濫造問題」もあったが——、むしろ世界市場にむりやり編入されたとき、その中でも必死に生き残ろうと技術革新を積み重ねる、日本の企業家たちの創意工夫の足跡を示す言葉であることを明らかにした。丹後の縮緬業者たちが、生糸不足の中、粗悪な原糸を使ってでも、何とか輸出や、博覧会（万博及び内国博覧会）の評価にたえるような縮緬を織りあげようと努力を重ね、しかし未だ道半ばにとどまっていたときに、その言葉が浴びせられたことを明らかにした。

当然それは、日本資本主義の、内なる発展のエネルギーをくみ取る作業となり、これまた論文提出者の意図にかなっている。

③ これまで、1930年代に入ると、世界恐慌の影響を受け、日本経済も崩壊状態に陥ったというイメージが一般化してきたが、こと丹後縮緬業に関しては、そのイメージは完全に間違いであったことを明らかにした。当該期、不景気にあえぐどころか、丹後縮緬業は、空前の好景気にわいていたのである。恐慌で、アメリカ向け生糸輸出が止まり、生糸価格が暴落したことが、慢性的に原糸不足になやむ縮緬産業——だけではなく、あらゆる絹織物産業——に福音をもたらしたからである。織物価も下がったが、糸価はもっと下がったからである。

ただそれにはもう一つの理由があった。少し価格が下がると、縮緬には数多くの買い手がいたからであった。長年、縮緬は、庶民にとって高嶺の花とっていいほどの高級織物であった。その高級織物を、価格帯が少し下がっただけで購入することのできる階層が、1930年代初頭には誕生していたのである。言い換えると、1930年代には、この国にも分厚い「中産階級」が形成されていたのである。それが、1930年代縮緬業が好景気にわいた、もう一つの原因であった。そしてこのもう一つの原因を考えると、日本資本主義発展の原因の一つが内需（国内市場）の拡大にあったことが、改めて明らかになるのである。

これも論文提出者の視点があればこそその発見であった。しかも論文提出者によれば（口頭試問）、同じような1930年代の織物業の好景気は、他の繊維産業においても広く見られたとのことだという。これは、日本資本主義論の今後の発展を考える上で、画期的な発見だといえるだろう。

これらの事実、従来いずれもあまり認識されていない事実である。論文提出者の視点があればこそ発見できた事実であった。したがってこれらの事実の発見は、本論文の一つの成果といえるだろう。

さらにいえば、以上の事実の発見が、ほとんどすべて論文提出者の発見した、若しくははじめて読解した新史料に基づく発見であったことも、本論文の評価すべき点であった。論文提出者の縮緬業関係史料の博搜ぶりは、他の誰の追隨も許さないほどのものであり、その博搜した成果の一部は『加悦町史』（資料編第2巻）に収録されている。

さて本論文にはもう一つの重要な達成がある。それは、商品（縮緬）を考えるのに、その品質が如何にして購買者に保証されるか、そのメカニズムに注目した点である。考えてみれば、一対一の対面販売ではない、大量生産、大量販売を一つの特色とする資本主義経済は、商品品質に対する保証システムの十分な発展を前提にしなければ成り立たない。なぜならば、生産し、販売する側は、その商品に対するプロフェッショナルだが、購買する側は、大抵の場合それに対する素人だからである。素人は何らかの、客観的な品質保証のある商品しか、購買しない。そして多数の素人を購買者として想定しない限り、資本主義経済は機能しないからである。

では日本資本主義の発展を支えた、その商品の品質保証システムとはどのようなものだったのか。

それが、江戸時代においては藩専売制度であり、大正・昭和期には、生産者自身による品質保証、ブランドの形成であったことを、明らかにしたのである。しかもその最も高度なシステムが、第三者や権力による客観的な保証システムではなく、生産者自身による主観的な保証システムであったことを明らかにしたことの意義は大きい。それは資本主義論としても、大きな問題提起になっていると思う。

以上確かに本論文において、日本資本主義の非脆弱性、その内的発展能力の高さは相当程度まで明らかになったと思う。研究課題は達成されたのである。しかも資本主義の発展を考えると、地域の地場産業の発展を通して、それを考えるということは、方法的にも画期的なことであった。

ただ、とことん丹後地域の縮緬業にこだわったために、そこで明らかになったことが、どの程度まで普遍化しうるものなのかについては、十分な答えが用意されていない。

例えば、1930年代の大恐慌期、丹後縮緬業が好景気にわいたという事実は、どの程度まで日本資本主義全体のこととして普遍化しうるのか、そのことへの言及はない。当然論文提出者は、普遍化しうると考えている。だから、その事実を踏まえて、恐慌が原因でファシズムが生まれるといった従来の図式的な歴史理解に異を唱える意欲も示しているのである。しかし答えが十分でないのは事実である。

ただその種の不十分性は、個別実証的な地域史研究には、常につきまとう不十分性だといえるだろう。大事なことは仮説を提示し、今後実証を深めていくことである。したがってこの種の不十分性があるからといって、本論文の意義がいささかでも損なわれるものでないことはいうまでもない。ながい日本資本主義発達史研究の歴史に、新たな一石を投じた画期的な論文になっていると思う。



したがって、本学位論文は、奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるに十分な内容を有しているとともに本審査委員会は判断した。